

## プレミアム花壇の部

### 総 評

審査は7月29日に行いました。今年は、新型コロナウイルスの感染拡大が収まりかけた頃の植栽となりましたが、天候は植栽直後の猛暑、さらに7月の長雨となり、徒長しがちな苗の栽培管理にご苦労されたことと思います。対象の8花壇は、そのような中でも長年の経験による高い栽培技術により上手に植物の管理をされていました。デザインについても、それぞれの場所の特性を生かし、美しい景観を作り出していました。そのため審査の結果はわずかな差で決まりました。最も高く評価されたのは、地域の子供たちの参加型花壇となりました。

個人、団体ともに、花壇を通して地域との交流を行うために様々な努力をされていました。栽培管理については、発生する植物残渣を公園内で1年寝かせて完熟させ、花壇内で持続的にリサイクルできる仕組みを確立している所などがありました。また、経費を抑えるため採種による自家生産苗中心の花壇でも、実生で出た優れた形質の種子を播種、選抜して新たなデザインに挑戦している所もありました。

今後の課題としては、土壌殺菌剤で生育不良をコントロールするのではなく、有機物の分解を促す土壌微生物を活かした健全な土づくりにも目を向けることが必要であると思いました。また、その年のテーマを作るなどメッセージ性のある花壇に挑戦されることを期待します。

### 最優秀賞評

最優秀賞を受賞した射水市の『小杉花作り同好会』の花壇は歌の森運動公園内にあり、特に今年は、地域の幼稚園児にウクライナの国花であるヒマワリの種ダンゴ作りから植栽指導、ヒマワリの絵を添えた看板設置等、参加型の取り組みが高く評価されました。

ももとは樹木の植栽樹だった四角い花壇の中央に赤や黄色のハゲイトウの苗を植栽後、子供たちに自分で作ったヒマワリの種ダンゴを植えつけてもらい、さらに自分で描いたヒマワリの絵の看板を花壇に立てました。ヒマワリは子供の背丈になる 100 cm程度の矮性種を選ぶなど、子供の目線で植物を楽しめるデザインになっており、子供たちが何度も花壇に通い観察したくなる教育的効果は、特筆すべき工夫です。一方、帯状のメイン花壇は、子供たちが植えたヒマワリの花壇を際立たせるために、例年と異なり、高さを抑えた宿根草のグループ植栽として、いることもデザイン性の評価が高いものとなりました。

今後も花壇が公共施設を利用する住民の憩いの場所としてだけでなく、今回の取り組みのように地域住民を巻き込んだ新たな花壇づくりの発信場所として発展することを期待します。

(審査委員長 渡邊 美保子)